

## 五 癖のいろく

無くて七癖、あつて八癖。兎角、人には何なりとも癖のあるものである。習慣は第二の天性とか云つて、ついた習慣は仲々抜け難く、而も悪き習慣はつき易く、善き習慣はつき難い。朝寝夜更しの習慣や、喧嘩口論の習慣や、其他、お饒舌の習慣、馬鹿笑の習慣、居眠の習慣、爪を噛む習慣、鼻糞を穿る習慣、頭を搔く習慣、放屁する習慣などは忽ちにつく。酒も烟草も亦此の類を出でない。

人毎に一の癖はあるものを、吾には許せ敷島の道

こんなのは至極結構であるが、お鼻にかゝつては困る。

或處に手あたり次第、否、目あたり次第、何でも値打を入れるといふ妙な癖の男があつた。或日先生の許に遊びに参つた。挨拶をして茶を出されると直ぐ、「先生この茶碗は久谷焼ですな、大變結構です、失禮ながら五圓位お出しになりましたか。これは紫檀の茶盆ですが、參圓位お出しでしたか、このお茶は玉露ですな、一斤貳圓位は致しませう」と、値打を入れるに急がしい。轉じて軸物から額へ移らうとするところへ。先生「お前さんは頗る妙な癖がある、何でも見當り次第、人の物に値ぶみをする、あれは人の感情を害ふのみならず、誠に失禮にあたる。かねぐ注意して置いたのに、今日も來るや來ぬに此の始末、ちつと心得さつしやれ」と懇に訓戒した。すると其男大に喜んで「イヤ有難、先生なればこそ毎度斯様に注意して下さる、實に只今の御訓戒は、我身にとつて價値千金!」。「ソラくまた値ぶみをなさる、私が言葉にまでも」。「ハイ誠に濟みませんでした、思はず知らず口をすべりまして今後こそ屹度心得ます、萬一違ひましたら罰金百圓を……」。「アラまた値打か、最う何うもならぬ、云へば云ふほど値ぶみする、勝手にするがよい、

俺は最う知らぬ」。先生そないに仰せられずと、勘辨して下さいませ、私は先生に見離され、其様に云はれては、最早三文が値打もございませぬ……」また値打を入れた。三つ兒の魂百までと云ふが、中々古い癖は止まぬものとみえる。

持つて生れた自性が、久遠劫來の焦付か、止めるに止められぬ貪瞋煩惱。捨てるに捨てられぬ無明業障。貪欲が起る、瞋恚が燃える、愚痴がこぼれる。諸佛菩薩はその惡癖捨てよ、捨てねば成佛出来ぬ、止めねば正覺得られぬと忠告せられる。けれどそれが出来ぬ。打つても叩いても三文が値打もない逆謗の死骸、仕様のない吾々も「釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、我等が無上の信心を、發起せしめたまひけり」。新しい信心念佛の癖をお授け下された。

人毎に一つの癖はあるものを、我にはゆるせ値ぶみするくせ  
値打入れる癖だけは私に許してくれと、前の人は云ふであらうが、我々は恚う云ふやうになつた。

人ごとに一つの癖はあるものを、我にはゆるせ念佛のくせ  
名聞の念佛でない、飾りの念佛でない、人に見せるのでない、御禮報謝の御稱名。頂いた御信心が自づと口に顯はれて来る、善い癖をつけて貰ひました。

念佛のうかぶものではなけれども、すがたをかりに彌陀の出這入り  
忍ぶれど聲に出にけり我が念佛、ちとたしなめと人の云ふまで。